

令和元年6月17日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03861

研究課題名（和文）地域社会における歴史意識の展開 地域史誌編纂に関する社会学からの検討

研究課題名（英文）Development of Historical Consciousness in Local Communities: A Study on Chikishi-shi Compilations from a Sociological Perspective

研究代表者

高田 知和 (Takada, Tomokazu)

東京国際大学・人間社会学部・教授

研究者番号：70236230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、町内会（自治会）などを範域として、その地域の人たちが自分らで地域の歴史をまとめていく地域史誌がどのようにつくられてきたかを明らかにしたものである。これを主に、「字誌」の伝統を持ち現在でも幾つもの地域でつくられている沖縄県、「開基」の周年記念としてつくられてきた北海道、それと郷土史研究の分厚い伝統のもとでつくられてきた長野県の三地域を事例にして、地域社会における歴史意識について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究での検討は、地域社会の歴史的側面が重視され、地域づくりやまちおこしなどで活用されつつある今日において、社会的には非常に大きな意義があると考えられる。これはまた、地域社会のなかでのさまざまな歴史性（指定・未指定を問わない文化財や景観、記憶など）を安易に活用しかねないことへの、学術の立場からみた批判的再検討という意味も含まれる。これらのことから、これからの地域づくりやまちおこしにおいても重要な提言を成し得るものである。

研究成果の概要（英文）： This study identifies how people within a community create Chikishi-shi--compilations of the history of their region--on their own and within the scope of their respective neighborhood associations. This was examined by considering three districts as case studies. Okinawa Prefecture has the tradition of Aza-shi, and Chikishi-shi are created in great numbers even today. In Hokkaido Prefecture, Chikishi-shi have been created on the anniversary of the reclamation work or "kaiki." In Nagano Prefecture, Chikishi-shi were created under the robust tradition of research on local history. Based on these, we have clarified the respective historical consciousness in the local communities.

研究分野：社会学

キーワード：歴史意識 地域史誌 字誌 地域社会 内発的発展

## 1. 研究開始当初の背景

本研究着想の背景としては、次の二点が挙げられる。

(1)第一に、地域づくりやまちづくりにあたり、当該地域の歴史的側面を重視・活用することが広く見られるようになったことである。本研究の申請時において、この傾向は既に常態化していた。すなわち、2008年の「歴史的まちづくり法（地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律）」や「歴史的文化的文化基本構想」などはもとより、重要伝統的建造物群保存地区の選定、世界文化遺産、世界無形文化遺産などの指定の他、本研究中には日本遺産の認定や文化財保護法の改正なども見られ、地域社会における歴史的側面の重視・活用がますます大きくなった。とはいえ、このうち活用を求める風潮に対しては批判も多く、慎重に取り組みねばならないのもちろんである。そのため、社会学の側からの検討が必要と考えられたのである。

(2)他方、本研究の背景の第二としては、研究代表者が従来続けて来た自治体史や「字誌」など地域史編纂書の研究の継続・発展という要素が大きい。研究代表者はもともと地域社会の歴史がどのように書かれ、どう受け容れられてきたかを明らかにする作業に取り組んでおり、当初は自治体史に着目した。ついで、より狭い範囲でまとめられた沖縄県の「字誌」に見られるような地域史誌にも注目するようになった。そして2012-14年度に科研費基盤研究(C)で助成を受けた（課題番号24530649）その「研究成果報告書」の末尾でも書いたように、この作業を進めるうちに「地域の歴史は誰が書くのか」という本質的問題に突き当たることとなったのであり、書き手・作り手・読み手 という区分に加えて、専門家・非専門家 という軸を設定して再考することが新たな課題として浮かび上がったので、今度は地域史誌に限定した視角から再検討していくこととしたのである。

## 2. 研究の目的

(1)本研究でいう地域史誌とは、沖縄県では「字誌」という名称で現に呼ばれており、また北海道では「部落史」という言い方がかつてされていたように、統一的な表現はない。本研究で便宜上地域史誌と呼んでいるに過ぎない。これは、生活圏域である字、大字（区）、町内会（自治会）、公民館、学校区などを範囲として、その地域の人たちが自分らでまとめる当該地域の歴史に関する書籍を指す。これは、自治体史のようにアカデミズム史学の 専門家 に執筆を依頼するものではない。また、もともと郷土史に造詣の深い人物がいれば別だが、大抵は一つの地区にそうそう郷土史家もいないから、通常は歴史的研究に関わりを持たない普通の人たちが集まってつくっている。したがってこれは、公的事業として地区住民が共同参画して、さまざまな議論や調査・分析を重ね、そのうえで当該地域の経験や記憶を記録化していく公共事業と言え、地域づくりに活用していくべき公共的な営みでもある。

(2)こうした地域史誌は、一部においては沖縄県や北海道の事例がよく知られていたが、実は全国的に盛んにつくられてきたものであった。研究代表者は、平成24-26年度の科研費助成による研究を通じてこのことに気が付き、全国的な状況を明らかにする必要性を認識した。そのため、本研究ではまず書肆的な情報を集めること、ついでそれが個人や地域社会にとってどのような意味があるのか（歴史意識の明確化）さらにはその意義と活用の可能性を明らかにしていくことを目的として設定した。

## 3. 研究の方法

(1)まず、当然ながら全国で地域史誌がどの程度つくられてきたかを知らねばならない。とはいえ、地域史誌は非常に狭い範囲を対象にしてつくられるものであるうえ、書籍の通常の流通過程には載って来ない。せいぜい地元の公共図書館に収められる程度であり、それもすべて収められるとは言い難い。そのため、各地域の市区町村立図書館で書肆情報を調べることにしたが、どうしてもそこから洩れる事例は出てくると考えられる。

(2)そのため少しでも多くの書肆情報を全国的に集める努力を払うとともに、先進事例・代表事例を取り上げて深く分析することが望ましい。そこで設定したのが、沖縄県、北海道、長野県の三県である。これは、前述のように「字誌」として現に盛んに編纂されている沖縄県、もともと「開基」以来の「部落史」として多くつくられてきた北海道、それと古文書も多く残されて、分厚い郷土史の伝統のもとでつくられてきた長野県としてその特徴を分けることができる。なかでも沖縄県北中城村で現在「字誌」編纂中の地区、北海道で繰り返し「開基」周年ごとにつくられてきた網走市内の地区、それと上伊那郷土研究会や伊那史学会などの郷土史団体のもとで伝統的に地域史研究が盛んに行なわれてきた長野県伊那市・飯田市の地区を事例として取り上げた。そして実際の編集委員会への参加や編纂で中心的役割を担った人物へのインタビューな

どを通して、それらの特徴を明らかにした。

#### 4. 研究成果

(1)「地域の歴史は誰が書いてきたか、また現に誰がどのように書いているのか」という問い  
本研究に取り組んだ当初、歴史学者の松澤裕作氏による、歴史を書くという行為は過去においても現在においても職業的な歴史家に独占されるものではなかったという指摘(松澤, 2017)は、本研究にとって大きな後押しとなった。というのは、地域史誌とは上述のように当該地域に住んでいる普通の人たちが書くものであって、まさにこれは職業的な歴史家ではないからである。そのうえで、本研究では「地域の歴史は誰が書いてきたか、また現に誰がどのように書いているのか」という問いを改めて考え、これを三つの異なった立場に区分した。それは第一に、上記の職業的な歴史家であり、アカデミズム史学に属する 専門家。第二にいわゆる郷土史家たち、ならびにその集まりである郷土史団体である。この二つは、かなりの相違を含むにせよ普段から歴史研究に関わっている人たちであるが、第三として本研究が対象とする地域史誌の編纂者・執筆者たちがおり、彼らは「歴史」と全く関係なく生きる人々」であるといつてよい(木村, 1997)。  
本研究では、地域史誌の主体をこのように整理して位置づけた。

##### (2)地域史誌の実状

研究の方法欄でも述べたように、全国の公共図書館が発信する書肆情報、さらに直接調査に行っている情報収集などによって、少しでも多くの地域史誌の把握に努めた。特にこれまで全国で最も多く編まれてきたと考えられる北海道では、北海道立図書館編『北海道市町村部落史誌目録』も参考にしようとして約 900 冊の地域史誌をデータとして集め、その多くを直接確認した。こうして見ると、地域史誌の刊行の多寡には地域差が明らかに認められる。上述のように北海道・沖縄県・長野県等に多いことへの説明は可能である。また、まちづくり事業の一環として多く編纂されてきた地域もある。しかし、根本的にはなぜ地域差があるのか、そこまでは本研究期間では調べ切れなかった。この点は今後の課題として措いておきたい。

##### (3)一般論としての地域史誌の特徴

地域史誌のなかには、執筆を郷土史家や何らかの業者に委託する場合がある。だがその場合でも、編纂委員会は地元の人たちが組織し、資料集め等はすべて地域の人たちが行なっている。編纂委員会は一般に 60-70 代の人々が中心となることが多く、他の委員も総じて年配者が多い(ただ北海道の場合、開基記念事業の一環として設定されるので中年の委員も少なくない)。また、他地区からの移住者は少ない。編纂開始から刊行に至るまでの期間は三年から五年ほどと思われるが、記念事業の一環とか、助成金が出ている場合などは一、二年で作られてしまうケースもある。

内容は後述のように通史、地誌、また記録としての側面を重視するものなどさまざまであり、総じて編纂の中心人物の考え方が大きく作用する。そこでは多くの場合、その地区で最も書き残したいことが最前面に出される一方で、自然へのまなざしは稀薄である。もともと地域社会の歴史として書かれているから、社会的側面の記述が圧倒的に多くなっている。また、執筆から刊行に至るまでの行程には、本作りのまったくの初心者には無理なところがあり、印刷業者が非常に大きな役割を担うことも多い。読み手としては、当然ながら当該地域住民が想定されている。そもそも、そう考えなければおさまりがつかないほど、地区内の小さな情報や個人情報が多く書かれている。その内容には当該地区内での「即時的・即物的」(木村, 1997)なものも多く、アカデミズム史学で問われるような大きな問題設定は絶無である。とはいえ、地域史誌のなかであけすけに歴史が語られたために住民間に不和が生じては元も子もないから、そこで書かれている出来事が実際にあった歴史的事実と完全にイコールでないこともある。それは誤りや嘘が書かれているのではなく、さまざまな歴史的事実のなかで記録化してよいものを選択して書いているということである。

##### (4)具体的な事例

以下では、本研究が設定した沖縄県・北海道・長野県の三地区に分けて考えてみよう。

###### 「字誌」の世界としての沖縄県

前述の如く沖縄県では、公民館単位での(ただし沖縄の公民館は内地の町内会とほぼ等しい)「字誌」としての編纂が盛んであり、2005 年時点で狭義には 200 冊、広義では 700 冊以上刊行されてきたといわれ(中村, 2005)、幾つもの地域で現に編纂中である。沖縄県での最大の特徴

は、戦争等によって文書資料が決定的に失われたこともあり、聞き取り調査に基づくものが多く、したがって現代の記述が非常に多い点にある。しかしこのことが、沖縄県でかくも熱心に「字誌」がつくられてきた理由の一つではないかと思われる。というのは、文書資料 特に古文書 が多数あったらそれを読解・分析するスキルが問われるが、聞き取り調査であれば 非専門家 であってもある程度は出来るからである。

実際に本研究では、同県北中城村内で現に「字誌」編纂中である地区の編集委員会に出席させてもらい、その委員会での様子をつぶさに見て来たが、そこで繰り返し行なわれたことは、編集委員たちと、編集委員が聞き取りをして来た語り手たちの記憶の執拗なまでの掘り起こし作業であった。文書資料が少ないために、人びとの記憶に依存して編纂するので、幾度も幾度も記憶を確認する作業が繰り返された。そこでは特に傑出した記憶の持ち主である古老の記憶でも誤りがあり得るので、その精査に非常に多くの労力が割かれるのである。

#### 「開基」記念と地域社会の現状を反映する北海道

全国のうち、地域史誌が最も数多く編纂されてきたのは北海道である。その理由は、ひとえにその「開基思想」にある。つまり、明治以降に内地から入植・開墾して何年目という「開基」の周年記念としてつくられてきた経緯がある。これがアイヌの人たちを視野に入れていないという問題を含むにせよ、この思想ゆえに数多くつくられてきた点は否定できない。そのため、道内でも地域史誌の多寡には地域差が認められ、道南の他、場所請負制で近世から既に拓かれていた地方では比較的少ない。ただそうした事情もあり、多くのところで「開基」百周年を過ぎてしまった近年は、明らかに刊行数が減っている。これは、時間の経過のため今日では入植や開拓の苦労が歴史の彼方に霞んでしまったからだと思われる。またそれとともに、北海道の地域社会が過疎化のために、記念冊子をつくるだけの力を失いつつあるのではないかと考えられる。そこで書かれていることの特徴は、「開基」以来の多くの経験に加えて、公立小学校の周年記念誌としてもつくられてきた点が挙げられる。これは入植・開拓とともに小学校を開設して来た歴史が、道内の地域社会にあるからである。

しかし最大の特徴は、地区内の世帯写真がその世帯の来歴説明や家系図、現在の家族構成や所有経営田畑などとともに詳細に書かれている点であろう。もちろん、掲載を断わる世帯もいるが、しかし多くの世帯が載っていることは確かである。

その実例として、網走市能取地区を挙げよう。同地区では、開基 60 年(1969)、80 年(1989)、100 年(2010)と少なくとも三度つくられたが、このうち 1989 年のものでは全 324 頁のうち、世帯写真の部分が 80 頁を占めている。しかも同書では後半部が学校史に宛てられていて純粋な地域史誌は 202 頁に過ぎないから、そのなかで実に 4 割を占めていることになる(『能取開基八〇周年・能取小学校開校七十五周年・能取中学校開校四十周年記念誌』)。また 2010 年のものでも全 245 頁中の 70 頁を占めているので、これも 3 割である(『能取開基百周年記念誌 能取』)。今一つ、鶴川町(現むかわ町)田浦二区の『田浦二区沿革史』(1983)では、全 351 頁のうち、実に 172 頁が「各家庭のあゆみ」と題される世帯写真とその紹介であり、同書の半分近くを世帯紹介が占めていた。これは、「部落史は、あくまでも一戸一戸の歴史の積み重ねであり、その総合である」と由仁町古川地区の『古川部落史』(1986)で書かれていたように、世帯単位での移動が頻繁にあった北海道ならではの事情を反映していると言えるだろう(そのため、地区内の住宅地図を各時代ごとに載せているところも多い)。

#### 分厚い郷土史の伝統としての長野県

その意味で、長野県は沖縄県や北海道といわば対極にある。つまり、近代以前の歴史と、その歴史の証しとしての古文書が相当量残されており、地域住民が基本的には定着して暮らしてきた。もちろんこれらは長野県に限らず他の諸県でも当てはまるが、長野県の場合は郷土史家が数多く現われ、彼らが拠って立つ郷土史団体が今なお活動を続けている点に特徴がある。つまり分厚い郷土史の伝統が見られ、それが大きな力になって預かっている。郷土史家が表立って地域史誌に携わる事例もあるが、彼らは監修にまわるとか、あるいは彼らの薫陶を受けた人たちが地域史誌編纂に携わるという事例も多くみられる。ここではそうした事例のなかから、伊那市羽広地区の『羽広誌』(2014)を見ていこう。

同書編纂の中心人物は高校の元教員で、現に上伊那郷土研究会や信濃史学会で活躍する方であった。彼は、上伊那郷土研究会が 1957 年以来発行し続けて来た『伊那路』のこれまでの研究成果に依拠するとともに、まず羽広地区の特長を幾つも挙げたという。これは同書完成後に長野県立歴史館で開かれた研究会の席上で、このような地域史誌の編纂は「やっっていて面白いと感じ

なかったらやってもらえない。だから最初にやったのは羽広地区にはこうした良い所があるのだということを出し合った」(2007年1月)と語っていたように、地域を自己肯定するものであった。ここでは、「羽広獅子舞」、近世の文化人、名産である羽広菜、地元の古刹などに多くのページが割かれるとともに、今回の編纂にあたって郷蔵で新たに発見された大量の近世文書は信濃史学会の会員に読解してもらい、貴重な近世農村史として掲載・記述された。

このように羽広地区では、従来から続けられている分厚い郷土史研究の伝統が力となって編纂が進められたことが分かる。もちろん、このように表立って郷土史研究の上に成り立っている地域ばかりではないが、その場合でも郷土史の力が大きく預かっていた点は認められよう。

#### (5) 編纂物としての地域史誌

上で見てきたように、地域史誌ではそもそも非常に狭い地域社会を扱うのであるから、原稿執筆に適した一次史料が必ず出て来るとは限らない。そのため、二次史料に依拠することが多いし、それもなければ記憶に依存する他ない。したがって結局そうした資料や記憶から一つの書物をつくることになるので、編纂物としての性格が当然強い。編纂された文献の場合、何を素材にして編纂されたかが重要であり、また二次資料の何を選択してくるかという「編纂過程における選択行為」(平野、2018)によっても出来上がった書物は変わってくる。特に地域史誌では、既に述べたようにあけすけに記述することで地域内の不和が生じては地域史誌編纂の意味を失ってしまうから、この「選択行為」には大きな意味があるといえよう。

#### (6) 地域史誌に見られる「歴史」とは何か 複数の「歴史」

ただ、如上のような地域史誌について、これは「歴史」であろうかという疑問が出て来るであろう。ここでいう「歴史」とは、何らかの出来事について、残された一次史料を用いてある一定のストーリーをつくって時系列に沿って説明していく過程と言って良いが、地域史誌で書かれてきたことは、そうした「歴史」だけでなく、むしろ地誌、記録の要素も大きい。しかし、社会学者の佐藤健二氏によれば、「民俗学や人類学や社会学がとらえようとする歴史は、現在の心意や行動のありように、無意識なままに作用している過去の構造である」という(佐藤、2011)。それを以てすれば、地域史誌は歴史的事実や記憶を記録していくものであると同時に、その根底においては「無意識なままに作用している過去の構造」としての「歴史」を書き残そうとしたものということもできるだろう。したがってまた、歴史的事実は確かにただ一つだったにせよ、それを記憶・記録する時点で説明する人によって種々違うものとなるので、「歴史」が複数となって現われるということも可能なのではないか。その意味で地域史誌は、地域を語るうえでの複数の語りの一つということができるだろう(高田、2017)。

#### (7) 次なる課題 郷土の概念と内発性からの再検討へ

以上のように地域史誌を明らかにしてきたが、「地域の歴史はこれまで誰がどのように書いてきたか、現にどう書かれているのか」という最初の問いに戻ると、アカデミズム史学と普通の人たち(専門家と非専門家)の間に位置づけられた郷土史や郷土史団体が残されたことになる。実は現代社会においては、郷土史団体は全国的にどこも危機的状況にあると言って良い。というのは、会員の高齢化や減少がどこでもみられ、その結果会費収入の減少と諸活動の低下が見られるのである。これは、常日頃から地域の歴史に関与している人たちが減少しているということの意味していよう。今日地域社会のなかでの歴史的側面が重視・活用されるようになってきていることを考えると、これはやはり一定の危機的状況があると言えるのではないだろうか。

また内発的發展からの再検討が必要である。社会学の鶴見和子が1976年に提唱し、経済学の宮本憲一が1982年に再整理した。郷土史の問題を解く鍵は、「内発性」と「発展」の相克関係の解明にある。(1)地域住民という主体、あるいは内発性の原則に安易にその理論の根拠を求めてはならず、むしろ内発性の分類や定義、主体の構成を支配する社会的文脈を批判的に再考し、その新たな組合せの可能性を探るべきである。(2)地域資源が内発性を根拠づけるのではなく、逆に発展プロセスがその方向性や内実を生み出し、その根拠としているに過ぎない。(3)内発的な発展プロセスは所与のものではなく、行為遂行的に構築されたものである。(4)だからこそ常に新しい構築の可能性を持つと考える(糸林、2019)。

これまでの郷土史が、今日のアカデミズム史学の高度な水準からはいろいろな批判に晒されるようになってきていることも事実である(馬部、2018など)。そのため、地域社会と歴史を検討するにあたっては郷土史研究や郷土史団体にも改めて焦点を当てる必要があるといえよう。そこで次なる課題として、郷土史の危機という観点からさらに検討したいと考えているのである(高

田、2019-21 年度科研費基盤(C) ( 課題番号 19K02049 ) )、

( 参考文献 )

系林誉史「内発的発展と地域社会」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』第 50 号、2019

『木村礎著作集 地方史を考える』名著出版、1997 年

佐藤健二「近代日本民俗学史の構築について / 覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 165 集、2011

高田知和「複数の「歴史」 地域史誌編纂の現場から考える 」『社会学年誌』第 58 号、2017

中村誠司「沖縄の字誌づくり 既刊字誌等の目録情報のデータベース化から 」『東アジア社会教育研究』第 10 号、2005

馬部隆弘『由緒・偽文書と地域社会 北河内を中心に 』勉誠出版、2019

平野仁也「近世における史書編纂と『朝野旧聞哀藁』」『日本史研究』第 675 号、2018

松澤裕作編『史学会シンポジウム叢書 近代日本のヒストリオグラフィー』東京大学出版会、2017

5 . 主な発表論文等

[ 雑誌論文 ] ( 計 4 件 )

系林誉史「内発的発展と地域社会」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』第 50 号、2019、pp.1-10

系林誉史「モラル・エコノミーと地域社会」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』第 48 号、2017、pp.1-11

高田知和「複数の「歴史」 地域史誌編纂の現場から考える 」『社会学年誌』第 58 号、2017、pp.123-137

高田知和「一般の人たちが地域で歴史を書くとき 沖縄県の「字誌」編集者へのインタビュー」『東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究』第 1 号、2016、pp.85-98

[ 学会発表 ] ( 2 件 )

高田知和「歴史と地域社会 誰がどのように地域の歴史を書いているのか」第 91 回日本社会学会大会、2018 年 9 月 15 日、於甲南大学

高田知和「地域社会の歴史意識 各地の地域史誌編纂・刊行事業を通しての考察 」平成 29 年度日本生活文化史学会大会、2017 年 10 月 1 日、於神奈川大学 ( 横浜市 )

[ その他 ] ( 計 3 件 )

高田知和「郷土史誌をもっと評価しよう」『ひすば』第 93 号、2018

高田知和「地域史誌の刊行事業について 大字誌編纂の諸事例から 」『日本出版学会会報』第 139 号、2017

高田知和「地域で地域を書く「大字誌」」『年報 香寺町の歴史』第 9 号、2015

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：系林 誉史

ローマ字氏名：ITOBAYASHI YOSHIFUMI

所属研究機関名：文化学園大学

部局名：服装学部

職名：教授

研究者番号 ( 8 桁 ) : 60301834

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。